

安芸郡山合戦と出雲尼子氏の陣城

安芸高田市歴史民俗博物館 秋本哲治

1 はじめに

- ◆出雲尼子氏が直接構築した城郭遺構は出雲には少ない
- ◆一方で国外には尼子氏の外征時の臨時的な陣城跡が各地に残る
- ◆その代表例といえる安芸国吉田における「郡山合戦」の陣城群を紹介

→近年の航空レーザ測量成果により、陣城群の全体像が判明

※陣城：本来「城」は防御を目的とした施設だが、臨時的には駐屯を目的とした防御意識の低い「陣」遺構も存在する。この報告ではそれらも含めて「陣城」として扱う

2 安芸郡山合戦とは

(1)通説

- ①出雲尼子氏が安芸国吉田に侵攻した、毛利氏の郡山城への攻城戦（籠城戦）
 - ②当主詮久（のち晴久）が大叔父久幸の反対を押し切って出陣
 - ③元就の偽情報により郡山城の南に布陣したため、形勢不利になった
- これらは近世の軍記物の影響が強く、近年再検討が進んでいる

(2)経過（通称「毛利元就郡山籠城日記」等より）

天文9年(1540)

- 8月10日 尼子詮久率いる軍が出雲を出陣
- 9月 大内義隆、周防岩国（永興寺か）に到着
- 9月4日 9カ国から集めた3万の大軍が多治比（風越山？）に到着
- 5,6日 尼子軍が吉田上村・太郎丸等郡山周辺に放火
- 12日 尼子軍、後小路に放火、郡山城下の大田口・広修寺縄手・祇園縄手で合戦
- 23日 尼子軍、青山三塚山に陣替。毛利軍、尼子本陣の風越山の一角を焼く
- 26日 尼子軍、郡山とは反対の南方面へ進軍し、大内家臣杉隆宜と小早川興景が撃退
- 10月4日 陶隆房、岩国を出立し厳島へ立ち寄り、翌日未明、厳島から矢野裏へ上陸
- 11日 尼子勢出撃、元就これを青山城の構え際に追い込む
- 12月3日 西条表（＝頭崎城）より陶隆房（大内軍）1万、郡山南の山田中山着陣
- 11日 宮崎長尾を毛利・宍戸軍が攻撃し尼子方と合戦
- 翌10年1月11日 陶軍、郡山西の天神山に陣替
- 13日 元就が宮崎長尾の尼子方国衆を攻め、尼子陣を焼き占拠
- 陶勢は三塚山の尼子軍を攻撃、陶重臣深野・宮川と尼子久幸が討死
- その夜尼子軍退却。毛利軍が追撃、石見で江の川渡河時に死傷者多数

(3) 合戦の変化

- ①9月～11月：郡山城下周辺で、尼子方の攻撃や移動に伴う大内方との局地的な戦闘
→尼子方による郡山城への本格的な攻撃はみられない
- ②12月～1月：陶軍到着により青山・三塚山及び宮崎長尾での大規模な戦闘
→大内方から尼子陣への本格的な攻撃
- ◎尼子軍は、大軍ではあったが郡山城を包囲はしていない可能性が高い

3 安芸郡山合戦における陣城

(1) 微地形表現図による調査

近年、航空レーザ測量による微地形表現図の観察及び調査により、

- ① 郡山合戦に関すると思われる未周知遺構が多数見つかった
- ② 既知の遺構についても詳細が判明
- ③ 遺構が全くないエリアの存在を確認

(2) 遺構の分布

- ① 郡山から少し隔てた南西～北西側に尼子方の陣城跡と思われる遺構群
- ② 郡山の東側～南側の稜線上に大内方の陣城跡と思われる遺構群
- ③ 北側には遺構が皆無 →郡山城が包囲された形跡はない

(3) 尼子方の陣城

尼子方の陣城であることが史料上明確なのは、風越山、青山、光井(三塚)山、宮崎長尾(宮崎城・甲田城)であるが、その他にもそれらを繋ぐルート上にも遺構群を確認した。これらには伝承等がなく立地・形状から郡山合戦時の尼子方陣城跡と推定できる。

A 風越山城（未指定、安芸高田市吉田町相合・多治比）標高 555m、比高 210m

- ・尼子軍の当初の本陣。9月23日の青山への陣替時に毛利方が焼く
- ・吉田周辺の最高所で、山頂部一帯はなだらかで要害の地ではない
- ・東西 200m×南北 400m。Ⅰ～Ⅲの3つの頂部に分かれ、全体を横堀や帯郭・土塁の外郭線で囲い虎口を設けるが、明瞭な郭はない。Ⅲには「横矢」を意識した屈曲した横堀や堀切による突出部や小規模ながら石垣跡が各所に残る。

【類似する陣城の例】 特異な構造は、近隣の陣城にも見られる

★**南山城・ハチガ壇城(備後)** 大永7年(1527)、和智細沢山合戦での尼子経久軍の陣城

★**大陣(安芸)** 天文13年(1544)、高山城攻めの尼子新宮党の陣城と伝わる

→緩斜面を「折れ」を伴う土塁、横堀、帯郭等により外郭線で囲い込む。

風越山を含めいずれも16世紀第二四半世紀の尼子氏の築城とされる

B 青山城（市史跡、同市吉田町吉田・常友）標高 370m、比高 165m

- ・ 9 月 23 日の陣替以降、尼子軍の本陣となり、10 月 11 日には山麓で毛利軍と戦闘
- ・ 東西 800m×南北 600m、全体がⅠ～Ⅲの 3 つの尾根で構成される大規模山城
- ・ 多数の大型の郭群と堀切、横堀、竪堀、土塁が各所に残る。Ⅰの中心部は突出して切岸が高く郭面は平滑、精緻な普請で求心性が高いことから、詮久本陣と思われる
- ・ 光井山城のある北西方向のみに階段状の平坦地群が複数構築されている
→ 尼子氏持つ最高水準の築城技術を示す遺構

C 光井山城（三塚山）（市史跡、同市吉田町吉田・相合）標高 372m、比高 160m

- ・ 天文 13 年 1 月 13 日、陶軍がここを攻撃し激戦の中で尼子久幸が戦死
- ・ 東西 1,000m×南北 600m、稜線上と支尾根上に、Ⅳ～Ⅶの 4 つの郭群で構成
- ・ 防御施設が少なく駐屯を重視した中心部のⅤとⅥに対して、端部のⅣとⅦは防御に特化しており、実戦的な土塁囲みの郭や風越山城と共通する空堀に囲まれた突出部が注目される。さらに小規模な石垣も残る。山頂部の郭は青山城に比べて求心性は低い
- ・ 青山城のある南東方向のみに階段状平坦地群が複数構築

D 宮崎城（未指定、同市吉田町相合）標高 301m、比高 80m

E 甲田城（未周知、同市吉田町相合・多治比）標高 307m、比高 80m

- ・ 「宮崎長尾」にあたり、尼子方の国衆南条・小鴨・本城・吉川・三沢・高尾らが在陣。
天文 9 年 12 月 11 日と翌年 1 月 13 日に毛利・宍戸勢が攻撃。近世に墓地化
- ・ 全体で東西 400m×南北 600m、光井山北側の丘陵上にあり、両城間の距離は 200m
- ・ D 長大な郭の北側に横堀・帯郭が伴う。切岸は明瞭で、端部に堀切・横堀・土塁が残る。
- ・ E 南北 2 つの郭群。郭は平滑で切岸は明瞭。堀切や横堀、土塁、虎口が残る高い軍事性

F タヌケが城（未周知、同市吉田町多治比・美土里町横田）標高 507m、比高 150m

- ・ 風越山北西 1.5km の集落と隔絶した尾根上に立地。ほぼ単郭といえる細長く粗い郭の外縁部に土塁・横堀・堀切・竪堀が密集し、軍事に特化した尼子軍の陣城と思われる

G 岩室城（未周知、同市吉田町多治比）標高 445m、比高 220m

H 後相合陣跡（未周知、同市吉田町相合）標高 430m 比高 150m

I 高猿城（未指定、同市吉田町多治比）標高 290m、比高 60m

（４）大内方の陣跡

J 会下山・高塚山城跡（未指定、同市吉田町吉田・国司）標高 393m、比高 190m

- ・ 元就の記録では「山田中山」と記され、12 月 3 日から陶勢 1 万が約 1 カ月在陣
- ・ 郡山の南、江の川を隔てた全長 2km に及ぶ稜線上にピークごとに加工の荒い郭群が残る
- ・ 堀切や土橋状遺構が残るが、防御性は極めて希薄で、駐屯を重視した遺構

4 陣城群からみた尼子氏

(1) 郡山合戦の実像

- ① 尼子軍は風越山～青山を結ぶルート上に布陣し、郡山城を包囲していない
- ② 風越山城は特異な構造だが類例もあり、青山・光井山との共通点もある
- ③ 青山城・光井山城は、長期駐屯のみでなく、大内軍後詰の攻撃を想定した構造
→ 尼子軍の目的は郡山城の攻撃ではなく、安芸の尼子方勢力(平賀氏、武田氏等)の支援

(2) 陣城の特徴

- ① 1540年の築城が確実で、再利用の可能性が低い→天文期の陣城の基準
- ② 出雲尼子氏の当主詮久が構築し一定期間在陣→戦国大名の「本陣」遺構
- ③ 出雲では見られない特異な遺構→外征先でしか使わないノウハウ?

(3) 尼子氏の再評価

- ① 16世紀前半において、先進的でバリエーション豊かな築城技術
- ② 極めて大規模の陣城を短期間に構築した組織力・マンパワー
- ③ 短期間で大内氏に対抗できるまで急激に成長した政治力・経済力

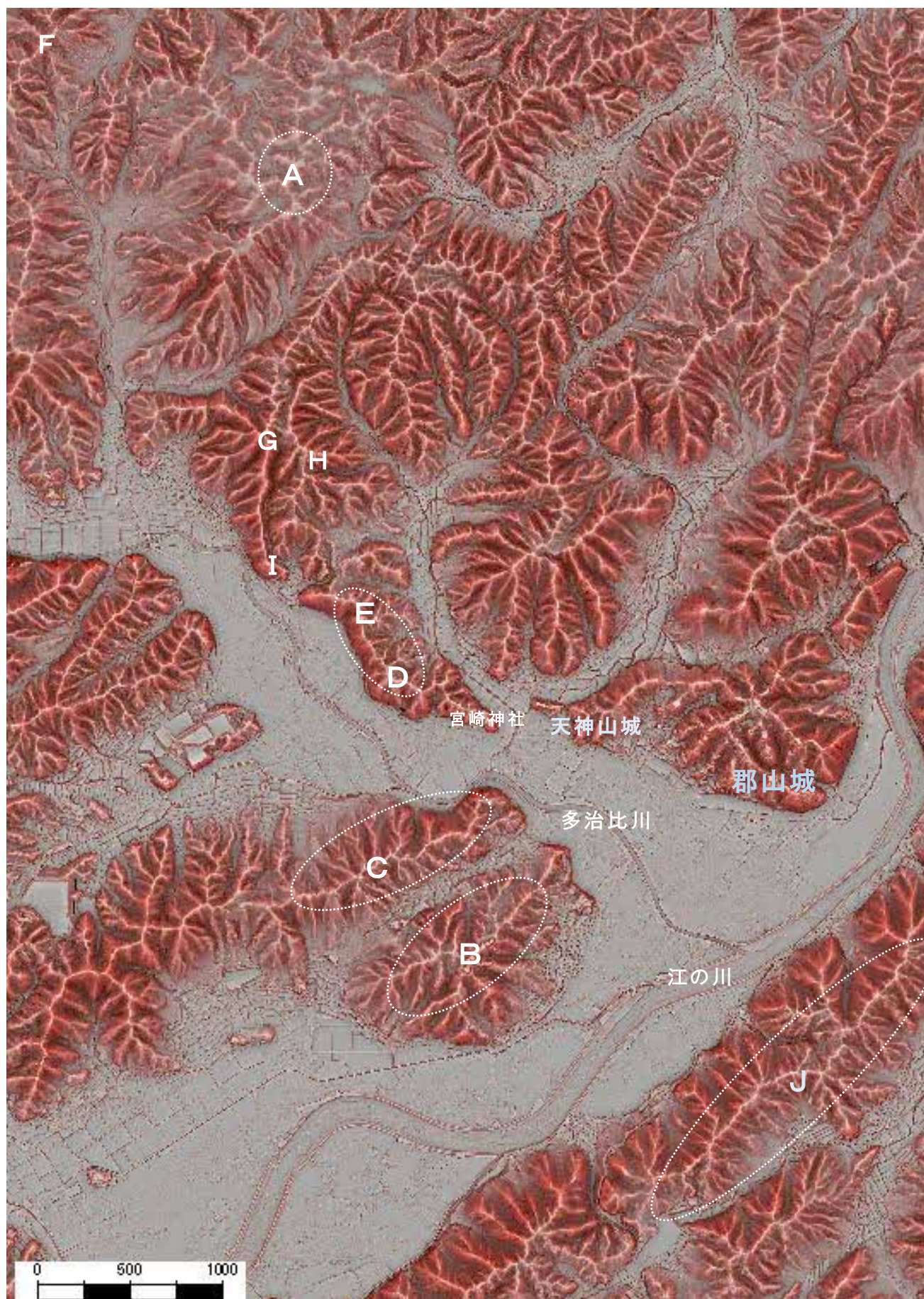
【参考文献】・木村信幸「実像の郡山合戦」『毛利の城と戦略』成美堂出版、1996
・吉野健志「いわゆる安芸郡山城合戦の再評価」『芸備地方史研究』228、2001
・寺井毅『尼子氏の城郭と合戦』戎光祥出版、2018
・秋本哲治「郡山合戦における陣城跡」『安芸の城館』ハーベスト出版、2020
・表邦男『広島の中世城館を歩く』渓水社、2021

毛利元就郡山籠城日記

(毛利家文書286)

天文九年秋至藝州吉田尼子民部少輔発向之次第
一九月四日、至多治比取手罷立国々之事、出雲、伯耆、因幡、備前、美作、備中、備後、石見、安藝半国、此勢打入之時三万也、
一同五日、吉田上村江打出、家少々放火、此日者不及合戦候、
一同六日、太郎丸其外町屋等放火、此時尼子衆先懸之足輕數十人討捕候、
一同十二日、後小路放火、此時大田口にて大合戦候、敵には高橋本城を始として数十人討捕候、味方二八井原之樋爪、渡辺源十郎二人討死、広修寺縄手、祇園縄手両口合戦、互死人なく候、
一同廿三日、青山三塚山江尼子陣替、此時敵本陣風腰山を一陣此方より焼崩候、
一同廿六日、至坂豊島敵動候之處、杉次郎左衛門尉、小早川中務少輔依為坂在陣、取向候、左候處、元就手衆馳合、路二里之間送り付候而、湯原弥次郎其他数十人討捕候、
一十月十一日、敵いつものことく、郷内打ちおろし候處、元就仕懸追崩、既敵陣青山搦際追込、三沢三郎左衛門尉、福頼、中西以下数十人打捕候、味方二八福原親類一人討打死、
一大内勢陶五郎、十二月三日為後卷、山田中山江山陣、勢数一万也、
一同十一日、両陣手合、此日於宮崎長尾、敵者伯耆南条、小鴨、雲州高橋、藝州吉川、味方二八毛利実戸衆合戦、敵一兩人討捕候、味方一人も無越度候、
一翌年正月三日、於相合口合戦、敵十余人討捕候、味方一人も無越度候、
一同十一日、陶五郎、郡山尾つゝき天神尾江陣替、
一同十三日、敵陣宮崎長尾江元就仕懸、則切崩、三沢、高尾始として、宗従者二百余人討捕、其儘敵陣焼跡二切居候、此日陶衆と三塚陣衆合戦候而、陶被官深野平左衛門尉、宮川以下十余人討死、敵には尼子下野守討死、
一同十三日夜、其まゝ尼子陣退散、敵却口を送り候、犬ふし山の雪ニ漕草臥、石州江乃川にて、或船を乗り沈メ、或渡りへ追ひたされ、死候者更不知其数候、先年道永天王寺御崩之時、於渡辺川死候趣之由申候、
二因茲、備中、備後、安藝、石見、多分、防州一味候、
二近日大内義隆有渡海、雲州可有乱入催半候、
二上口之儀、此時可被押下事肝要候、
二去年九月四日ヨリ今年正月十三日之間、於通路討捕、日々於野伏射殺候不知数候、定而可有其間候条、不能申候也、

天文十年二月十六日



郡山合戦関係陣城位置図(、安芸高田市教委提供赤色立体地図に加筆)

